広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第２号　2021　454－463

同一社会文化を背景とする バイリンガルの説得のストラテジー

―キルギス語とロシア語の意見文のトピックに着目して―

西　條　結　人

（2021年10月５日受理）

Persuasion Strategies of Bilinguals from the Same Sociocultural Background: Focusing on the Topic of Opinion Essays in Kyrgyz and Russian

Yuto Saijo

Abstract: This study aimed to identify the characteristics of persuasive writing by Kyrgyz–Russian bilinguals in Kyrgyzstan. To achieve this objective, 112 university students in Kyrgyzstan were classified into four groups and asked to write the following opinion essays: (1) Kyrgyz essays by Kyrgyz monolinguals (KK), (2) Russian essays by Russian monolinguals (RR), (3) Kyrgyz essays by Kyrgyz–Russian bilinguals (Kyrgyz dominant) (KRK), and (4) Russian essays by Kyrgyz–Russian bilinguals (Russian dominant) (KRR). After the data collection, with reference to Connor and Lauer's (1985) "Understanding Persuasive Essay Writing," a qualitative analysis of the opinion essays was conducted from the perspective of the topic of ethos, which is related to writer's credibility. The study results indicate that there are differences in the ethos topics used preferentially among the four groups, thus suggesting that there may be different common knowledge and different preferred topics in each linguistic community.

Key words: Persuasion strategies, bilingualism, opinion essay, ethos, topic
キーワード：説得のストラテジー，バイリンガリズム，意見文，エートス，トピック

１．はじめに

説得とは，送り手が，非強制的なコンテキストの中で，受け手の態度や行動を自らが意図する方向に変化させようとする（深田，2002）行為である。受け手のネガティブ・フェイスを侵害する恐れがあり，異文化間コミュニケーションにおいては特に慎重に行われる必要がある行為であると言えよう。

説得は話し言葉と書き言葉の両方によって行われるが，書き言葉は，書き手と読み手が異なる空間，時間におり，書き手の文章によっては書き手の見えないところでフェイス侵害行為が起こる可能性もある。文章における説得が必要な場面では，互いにどのようなスタイルを用いるかはもちろんのこと，書き手がいかなる内容を用いて文章を書くのかを理解することは異文化間コミュニケーションにおける相互理解に貢献しうると言える。

異文化間の説得を目的とする文章の比較研究は，主に対照修辞学の分野で行われ，モノリンガル間の比較

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：永田良太（主任指導教員），松見法男，柳澤浩哉

研究は数多く行われているが（西條，2019a），バイリンガルの説得の構造はあまり明らかにされていない。モノリンガルとバイリンガルの特徴を明らかにすることは，言語習得研究の観点からも意義があると考える。また，説得を目的とする文章のスタイルについては，学校教育に関連があることが先行研究において指摘されている（西條，2019a）。そのため，二言語以上を併用する同一社会文化における言語と教育の関わりや，バイリンガルがどの言語の影響を強く受けるのかといった言語的優位性を踏まえながら，文章における説得の構造を明らかにすることが重要であると考えられる。

本研究では，同一社会文化の例としてキルギス共和国（以下キルギス）を取り上げる。キルギスは90以上の民族が暮らし（Orusbaev et al., 2008），国家語をキルギス語，公用語をロシア語とする多言語多民族国家である。角田（2009）を参考に，言語類型論の観点から見れば，キルギス語は「アルタイ語族」，ロシア語は「印欧語族―スラブ語派」に属する言語であり言語体系が異なる言語である。

本研究でキルギスを取り上げる理由としては，キルギスはキルギス語とロシア語のモノリンガルとバイリンガルが共存しており，１つの社会文化におけるモノリンガルとバイリンガルの比較検証が可能であることによる。キルギスのように同じ１つの社会の中で様々な言語や習慣を背景とする人々が生活しているとすれば，同一社会の中で民族と言語，文化が複雑に関係しており，柳沢・石井（1998）の「異なった言語を母語とする２つ以上の集団が社会的に接触する状況」である言語接触であり，コミュニケーション上の問題が起きる可能性も考えられる。キルギスのような同一社会内に異言語，異文化を持つ人々を対象とした説得を目的とした文章を観点とした比較研究は管見の限り少ない。

そこで，本研究ではキルギス語とロシア語という２つの言語を主な言語背景とするキルギスにおいて，キルギス語・ロシア語バイリンガルの説得を目的とした文章の特徴を明らかにすることを目的とする。

２．先行研究

2.1. キルギスの言語事情と教育に関する研究

キルギスの言語事情と教育に関する研究としては，学校教育と言語事情に関する報告（Landau and Kellner-Heinkele，2001; Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki[1]，2018），言語意識と教育に関する研究（Korth，2005），大学における言語選択と使用に関する研究（西條，2019b）等が挙げられる。

Landau and Kellner-Heinkele（2001）ではキルギスの学校ではキルギス系，ウズベク系を除く他の民族は，所属民族の言語ではなく，ロシア語を使用していることが明らかになっている。キルギス系，ウズベク系を除く民族については自らの民族言語よりもロシア語を民族間の交流言語として用いていることが窺える。Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki（2018）によれば，2017-18年度のキルギス国内の初等中等教育機関について，学校数の約90％はキルギス語教授学校，ロシア語教授学校，もしくはキルギス語・ロシア語二言語教授学校であり，児童生徒の87％がキルギス語，ロシア語または二言語教授学校に在籍している。高等教育機関では，2017-18年度はロシア語を教授言語とする学生が66.7%，キルギス語を教授言語とする学生が24.7% である（Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki，2018）。児童生徒，学生の多くがキルギス語もしくはロシア語，またはその両方で教育を受けていることが窺える。

Korth（2005）は，キルギス語教授学校とロシア語教授学校の教授言語と居住地によって「キルギス語モノリンガル」「ロシア語モノリンガル」「キルギス語・ロシア語バイリンガル」の３つに大別でき，都市部と地方で言語の習熟度に差が生じていることを明らかにしている。キルギス語教授学校出身学生は思考する言語としてキルギス語を使用し，ロシア語教授学校出身学生は授業中のメモやノートテイキングでロシア語の使用が顕著に見られ，大学内での使用言語がロシア語のみで成立していることが示唆されている（西條，2019b）。

2.2. 異文化間の説得に関する比較研究

説得の談話を特徴付け，文章の説得のストラテジーを特定するための分析の観点としてConnor and Lauer（1985）の「説得のアピール（persuasive appeals）」がある。Connor and Lauer（1985）は，「説得のアピール」をアリストテレスの「エートス」「ロゴス」「パトス」に基づき，「信頼性（書き手自身を文章に関連づけるもの）」「言論（論理的に正当化される証拠や妥当な行動をもって読み手の説得にあたるもの）」「情動（読み手への共感や価値観に訴えるもの）」の３種類に分類することを提唱している。ただし，Connor and Lauer（1985）の「信頼性」のアピールは，先行研究において「言論」と「情動」に内包されている可能性が指摘されており，Kamimura and Oi（1998）は「信頼性」を外した分析項目を立てている。また，近藤（2013）及び西條他（2015）も「信頼性」を外し，独自の「道徳」「習慣」のアピールを立てている。

これらの先行研究の結果，英語母語話者は「言論」（Kamimura and Oi, 1998），日本語母語話者は「情動」

(Kamimura and Oi, 1998；近藤，2013)，ウズベク語母語話者は「道徳」の使用率が高かった（近藤，2013）ことが明らかにされている。

「説得のアピール」の組み合わせに関しては，スペイン語母語話者は，「言論」と「習慣」を組み合わせ，日本語母語話者は「言論」と「情動」を組み合わせることを好む傾向が見られた（西條他，2015）。

いずれの先行研究も，母語によって用いる「説得のアピール」の傾向が異なり，言語ごとに固有の論理構造があることが示唆されている。

2.3. 研究課題の設定

先行研究の分析により，キルギスにおける言語話者は大きく「キルギス語モノリンガル」「ロシア語モノリンガル」「キルギス語・ロシア語バイリンガル」の３群に大別でき，民族や出身教授学校によって使用言語が異なることや，地域によって二言語の習熟度に差が生じていることが明らかになった（Landau and Kellner-Heinkele, 2001; Korth, 2005；西條，2019b）。

これまでの「説得のアピール」の観点に基づく比較研究では，特定の１つの言語を母語とする話者を中心とした類型化が行われているが（Kamimura and Oi, 1998；近藤，2013；西條他，2015），バイリンガルや，同一社会文化における異なる言語話者を対象とした比較研究は行われておらず，その言語的優位性も明らかになっていない。また，先行研究では「信頼性」を外し分析が行われているが，柳澤（2004）によれば「エートス」は，書き手が自分自身について，十分な知識・経験がある，公正な見方ができる，正しい方向を目指している，感じがいい，といった印象を与え，書き手の説得効果を大きく左右するものであるという。リース（2014）は，「エートス」について書き手の議論は読み手が共有しているいろいろな前提に基づいていれば，あるいは特殊な場合においては読み手を書き手の権威に従わせることができるならば，読み手を説得できると述べている。柳澤（2004），リース（2014）からも，説得を目的とする文章において「エートス」が重要であり，書き手にとっては，「エートス」をどのようなトピックと関連させ，読み手を説得しようとするかかが重要になってくることが窺える。「トピック」はコミュニケーションの場における情報提示の順序を把握するための概念であり（メイナード，2004），「エートスのトピック」を明らかにすることで，書き手の説得のストラテジーを明らかにする手立てとなる。

上述の残された課題を踏まえ，本研究では意見文課題を用いて，「エートスのトピック」の観点からキルギス語・ロシア語バイリンガルの意見文の特徴を明らかにする。具体的に以下の二つの研究課題を設定する。

研究課題１：同一社会文化を背景とした異なる言語話者は意見文においてどのような「エートスのトピック」を用いようとするか。

研究課題２：同一社会文化を背景とした異なる言語話者は意見文において「エートスのトピック」に言語的優位性が見られるかどうか。

３．調査と分析の方法

先行研究の分析において書き手の意見が出現しやすい課題を設定する必要があると判断されたため，本研究では意見文を取り上げる。ここでの意見文は，書き手の意見や主張を，根拠に基づいて論理的に述べ，読み手を説得する文章（近藤，1996）とし，伊集院・高橋（2012）を参考に課題文を作成した。意見文課題はキルギス語，もしくはロシア語で収集し，データは筆者が日本語訳したものを使用する。日本語訳についてはキルギス語，ロシア語を母語とし，日本語が堪能な協力者を通じて訳出した文章の正確さを確認した。課題の読み手の設定は，書き手と同じ言語文化圏（母語場面）とした。課題は「インターネット社会において新聞や雑誌は必要か」というものである。

本研究での調査対象とする意見文は，（１）キルギス語モノリンガル【キルギス語意見文】（KK），（２）ロシア語モノリンガル【ロシア語意見文】（RR），（３）キルギス語･ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）【キルギス語意見文】（KRK），（４）キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）【ロシア語意見文】（KRR）から成る。（１）から（４）群いずれも，キルギスの大学に所属する大学生から成り，回答者の優位な言語で作文を書いてもらうことにした。回答者の母語については Skutnabb-Kangas（1984）や田浦（2014）を参考にし，「日常生活において回答者が書く場面において最も使用する言語」とし，フェイスシートにおいて「キルギス語のみを使用する」を選択した者は KK，「ロシア語のみを使用」を選択した者は RR，「キルギス語・ロシア語の両方を書く場面で使用しているが，キルギス語をよく用いる」を選択した者は KRK，「キルギス語・ロシア語の両方を書く場面で使用しているが，ロシア語をよく用いる」を選択した者は KRR とした。バイリンガルについては，どちらの言語も年齢相応のレベルまで達しておらず，どちらの言語も自信がなく，語彙数の少なさや文法的な正確さが欠けているダブル・リミテッド（迫田，2020）の可能性も考えられるが，なるべく多くのデータを確保するため，書く能力は本調査では考慮していない。

調査は2019年１月から２月にかけて紙媒体で実施し

た。ビシケク市にある３大学に通う大学生112名に回答を依頼し，KK 18編，RR 29編，KRK 37編，KRR 28編の意見文データを得た。

本研究では，書き手がどのように読み手の信頼性を得ようとしているかを検証するため，「エートス」に着目し，KK，RR，KRK，KRK の４群の意見文を分析する。

「エートス」の分析の枠組みと判断基準については，Connor and Lauer（1985）の「信頼性のアピール」を参考に，「書き手の直接的体験談」「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」を指標とし，分析を行った。

４．結果

KK，RR，KRK，KRR の４群の意見文について Connor and Lauer（1985）の「信頼性のアピール」に基づく分析を行った結果を示す。事例横の（　）については書き手の所属群，回答者番号，文番号を記している。

4.1. キルギス語モノリンガル（KK）

KK の「エートス」に関しては，「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」の２点が出現した。それぞれ事例を示し，結果を報告する。

１点目の「書き手の直接的体験」としては，KK05のような事例が挙げられる。

> Окуучуларды караңыздарчы!「小学生を見て欲しい。」Кичинекей 1-2-3-класстын окуучулары өздөрү кичинекей болуп алып өзүнөн 2 эсе чоң китеп баштыгын көтөрүп алат.「１，２，３年生の小さな小学生が，自分達よりも２倍は大きな鞄に本を入れて背負っている。」（KK05:20-21）

KK05では，書き手が経験した，もしくは目の当たりにしたキルギスの学校教育における生徒の状況に関する体験を挙げている。

また，KK08は，インターネット無しの生活は考えられないという現代社会の状況と，インターネット接続にかかる費用を説明している。

> Бир үй-бүлөдө жок дегенде бир киши бирдик үчүн айына 500 сом кетирет.「家族内で一人あたりに少なくとも月500ソムがかかる。」（KK08:7）

これは書き手自身を含む家族の習慣を示すことで，読み手の書き手への信頼性を高める効果を得ようとしていることが窺える。

２点目の「書き手と読み手が共有する関心と視点」については次のような事例が挙げられる。

KK02は，「インターネットの普及に伴い新聞や雑誌などが読まれなくなったとは思わない。」という主張の根拠として，次のように述べている。

> Анткени, “беш кол тең эмес”дегендей кээ бир адамга тактап айтканда үйдө отурган адамдар газета, журналдардан жаңылыктарды окуганды жакшы көрүшөт, талап кылышат.「なぜならば，「五本の指は同じではない」と言われるように，特に毎日家で過ごす人々にとっては，ニュースを新聞や雑誌から読むのが好きかもしれない。」（KK02:10）

この KK02の事例からは書き手と読み手の言語文化的背景で共通するキルギス語の諺や格言を「エートス」としながら，理由を述べていることが窺える。

さらに，KK11はソビエト時代のキルギスの社会状況を「エートスのトピック」として提示している。

> Мисал келтирсек, илгери СССР убагы, деги эле мурунку заманды карап көрсөк, бардыгы башкача эле.「例えば，昔のソ連時代，あるいはそれ以前の時代を見てみると全てが違っていた。」（中略）Бирок, ошондой болсо да, азыркы заманга салыштырмалуу бир кыйла оор эле.「しかし，今の時代と比べれば相当困難であった。」Анткени, ал убакта интернет жок эле.「なぜならば，昔はインターネットが無かったからである。」（KK11:4, 8-9）

KK11は「科学技術の発達により現代社会は便利になった」という主張を上述のようなトピックを理由に用いて意見を展開している。書き手は，ソビエト時代のキルギスを例として示すことで，読み手と過去から現代の歴史的な流れを共有していることが窺える。

KK13では，書き手が二人称代名詞親称単数の сен（sen）を用いて，書き手がインターネットの利点について読み手と共有しようとしていると考えられる。

> M: сайттарга кирип онлайн китеп <u>окусаң</u> болот, алыскы жакын адамдар менен сүйлөшүп көрсөн болот мен ойлойм интернеттин көп эле пайдасы бар деп.「例えば，（君は）ウェブサイトにアクセスしてオンラインで本を読むことができ，遠くにいる親しい人が連絡を取れる等，私は，インターネッ

トは利点が多いと思う。」（KK13:4）

しかし，文中では，二人称代名詞は省略されており，Tokubek uulu（2009）を参考にすると，下線部は，動詞 оку（oku）「読む」の語幹と接尾辞 са（sa）に人称接尾辞（ң（ng））から下線部を含む文の主語が сен（sen）である。二人称代名詞親称 сен（sen）は，一般的に「同等」「目下」の相手に用いられ，「目上」の相手には憚られる表現であるため，書き手は読み手と心的距離を接近しようとする一方で，読み手への直接的な言語形式を避けようとした可能性がある。

KK14は，読み手に現代のキルギスで発行されている新聞の内容の質の問題を主張している。

Ал жерде кыргыз жылдыздары жөнүндө маалымат, же болбосо бир күндүн ичиндеги болгон окуяларды жарыялайт бул ушак же болбосо жөн эле убакыттын кеткендиги деп эсептейм.「キルギスの芸能人についてのゴシップや一日に起きたイベントについて報道されるが，これは単なる噂話で，時間を浪費する内容であると考える。」（中略）Мисалга алсак, “Супер инфо” газетасы жөн гана ушак жана бекерпоздор үчүн арналагн газета деп эсептейм.「例えば，新聞「スーパー・インフォ」は噂好きな人や怠け者のために発行されていると思う。」（KK14:14,16）

KK14は，読み手が同じキルギスの学生ということを生かし，実在する新聞「スーパー・インフォ」を挙げ，書き手と同じ読み手の文化的背景を利用し，説得しようとしていることが窺える。

4.2. ロシア語モノリンガル（RR）

RR の「エートス」としては,「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」の３点が出現した。

１点目の「書き手自身の直接的体験」の事例は次の通りである。

Мне нравилось читать детские рассказы посмотреть рисунки.「私は子供向けの物語を読むことや，絵を見ることが好きだった。」（中略）Впрочем можно уйти далеко в прошлое, когда мне было 12-14 лет это было очень приятно читать газету, я почувствовала некую гордость за себя я хвастался перед родителями.「かなり昔のことになってしまったが，12歳から14歳のときには新聞を読むのが楽しく，それをとても誇りに思っており，両親に自慢したことを覚えている。」（RR11:19,21）

RR11は，書き手自身の趣向や過去の体験に関するトピックを用いて，書き手の読み手への信頼性を高め，読み手を説得しようとしていることが窺える。

２点目の「書き手と読み手が共有する関心と視点」として，RR16は書き手の新聞，雑誌に肯定的な意見を展開するために以下のようなトピックを選んでいる。

Вы будете брать то что нужно вам, ваша жизнь станет проще и у вас будет много времени.「そうすれば，あなたは自分に必要なものだけを取り，生活もより快適になり，時間の余裕もできる。」Если у вас есть младший брат сестра или ребёнок, то просто следите за информацией которую получает он.「もし，あなたに弟や妹，あるいは子どもがいれば，彼らが受け取る情報に対し，あなたは目を離さないようにすべきだ。」（RR16:16-17）

下線部に着目すると，RR16の事例は二人称代名詞 вы（vy）を用いて書き手に提言をしている。ロシア語の二人称代名詞は親称単数 ты（ty）「君」と敬称複数 вы（vy）「君達 / あなた方」の２種類がある。вы は，二人称複数であるが，一人の相手に対しても敬語として用いられ（宇多，2009），敬称単数としても用いる。このことからも書き手が読み手との心理的距離を保ちながら，仮定のトピックを通じて，書き手と読み手とで視点を共有しようとしていることが窺える。KK では，仮定の話を用いて書き手が読み手の立場に立ち，視点を共有するということは見られなかったことからも，同じ「書き手と読み手が共有する関心と視点」としても内容が異なっていることがわかる。

３点目の「書き手の性格の良さ，判断力」については，次のような事例が挙げられる。

Ну что если вы умный опытный человек, знающий что вам нужно от жизни.「もし，あなたが人生のために何が必要かを知っている，賢く，経験のある人であればどうだろう。」В таком случае вы сами способны фильтровать поток информации, отделяя полезное для вас от лишнего и вам уже не нужен никто для этого.「もしそうであれば，あなたは自分自身で情報の流れから必要なものを選別でき，不要な情報と有益な情報を区別することができる，そしてこのためにあなたはもう誰も必要ではない。」Я считаю что если вы

сами способны фильтровать информацию-то интернет - для тебя.「私は，あなたが自分で情報を選別できれば，インターネットは君のためのものであるという意見である。」（RR06:14-16）

RR06は，読み手の立場を想定し，書き手から答えが提示されていることから書き手が読み手の考えを判断しつつ意見を展開していることが窺える。また，文法的に下線部を見れば, 15文目で読み手は для вас「あなた（あなた方）にとって」だったのに対し，16文目では для тебя「君にとって」を用いている。тебя は ты（ty）の生格であり，вас は，вы（vy）が生格に格変化したものである。書き手は，ты（ty）を用いることで，読み手を１人に限定し , 親密さを感じさせ，読み手との心理的距離を接近させるような工夫がみられる。

また，RR18のように書き手の性格の良さを表す事例も出現している。

Мне гораздо приятнее держать в руках книгу или журнал, слышать шелест страниц, почувствовать запах, полностью погружаться в мир который кем-то был так старательно написан.「私にとって，本もしくは雑誌を自分の手に取り，ページをめくる音を聞き，匂いを感じること，誰かが努力を重ねて書いてくれた世界に没頭することは遥かに心地よいものである。」（RR18:6）

RR18では，書き手自身の経験を示す以外に，書き手以外の人物に配慮するような文になっており，書き手の性格の良さを表現していると考えられる。

4.3. キルギス語・ロシア語バイリンガル（キルギス語優位）（KRK）

KRK では ,「書き手の直接的体験」「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」のすべての項目が出現した。

１点目の「書き手の直接的体験」としては，次のKRK37のような事例が挙げられる。

Улуу адамдардын бардыгы эле «Союз убагынды жакшы болчу» деген создорду айтышат.「お年寄りの人から「ソ連時代は良かった」という声をよく耳にする。」（中略）Жаныдышым мумкун бирок менин оюмча да ушул себептерден улам союздун адамдары гезитти тандашат деп ойлойм.「間違っているかもしれないが，私の意見ではソ連時代に生まれた人々は新聞を選択すると思う。」（KRK37:8,10）

KRK37は，書き手の実体験を踏まえた文を用い，前述の書き手と読み手の共有している社会集団を過去と現代の両方を提示する信頼性へのアピールに加え，書き手の実体験を加えることでさらに説得効果を挙げようとしていることが窺える。同じキルギス語意見文である KK においては，KRK のような書き手以外の人物から伝聞したことを書き手の体験とし，過去の時代の情報を振り返るというトピックは見られなかった。

２点目の「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」は，KRK06，KRK10，KRK26，KRK31におけるキルギス語の Саламатсыздарбы.（salamatsïzdarbï）「こんにちは。」が挙げられる。ここでは，KRK06の事例を報告する。

Саламатсыздарбы.「こんにちは。」Менин оюмча экөөнүн тең кереги бар, анткени азыркы тапта бир гана жаштар эмес, кары картандар да бар экенин унутпашыбыз керек деп ойлом.「私の意見では両方とも必要である，なぜならば，今は若者だけではなく，古い世代のことも忘れてはいけないと思う。」（KRK06:1-2）

саламатсыздарбы.（salamatsïzdarbï）「こんにちは。」は，改まった場面での複数の相手に対する挨拶表現であり，挨拶の対象となっているのは，不特定多数の読み手であると考えられる。冒頭で読み手への挨拶を行うことで「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」を示し, 書き手がいかに信頼できる人物かをアピールするとともに，書き手の文章が読み手に対する意見表明を明確にする狙いがあると考えられる。挨拶の後には，二人称代名詞敬称単数 сиз（siz）（KRK26）と敬称複数 сиздер（sizder）（KRK10）を主語とする文が出現したが，人称代名詞は省略されていた。

３点目の「書き手と読み手が共有する関心と視点」については，次のような事例が挙げられる。

Илгери чоң аталар жылкы кармап боз үйдө жашашчу.「昔，我々の祖先は馬を飼い，ボズウイに住んでいた。」Кыргыздар ушундай нукта жашоосун улантуу эмес, жаңы жашоого өзгөрүп, ошол жактын зыянын, пайдасын ажырата билүү жана пайдалуусун өзүнө алуу.「キルギス人は昔ながらの生活をそのまま続けるのではなく，新しい時代に適した生活に変え，長所と短所を分け，有用な面を

使わなければならないと思う。」(KRK12:4-5)

KRK12は書き手と読み手で共有されている視点である所属民族の過去の生活を提示し，書き手の意見に読み手を引き込もうとしていることが窺える。

４点目の「書き手の性格の良さ，判断力」の事例として，KRK27を挙げておく。

Мен өзү айылда төрөлүп, өскөм, мен мектепте окуп жүргөндө бизде интернетке байланыш аябай жай жана жетишсиз болчу.「私は村で生まれ育ち，私が学校で学んでいる時は，インターネットへのアクセスが遅く，コンピューターの数も足りていなかった。」Ошондуктан мен үчүн газета, журнал, китептерден маалымат алуу оңой болчу.「そのため，私にとっては新聞，雑誌，本を通じて情報を探すことは便利であった。」(KRK27:5-6)

KRK27は書き手自身の出自を示すトピックを選択することで，読み手と同じキルギスで育った者で，その中でも地方出身であることを示し，その置かれた環境から意見を展開していることが窺える。

4.4. キルギス語・ロシア語バイリンガル（ロシア語優位）(KRR)

KRR では，「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」の３つの項目が出現した。

「書き手の直接的体験」としては，KRR05の次のような事例が挙げられる。

Помните журналы особенно детские?「(あなたは）特に，子供用の雑誌を覚えているだろうか。」Мои родители часто мне их покупали, потому что телевизор и журнал были главным развлечениями.「あの頃の主な遊びはテレビと雑誌だったから，よく両親に子供用の雑誌を買ってもらっていた。」(KRR05:13-14)

KRR05は，下線部 помните（pomnite）は動詞 помнить（pomnit'）の二人称複数現在型で，文中で主語は省略されているが，二人称代名詞敬称 вы（vy）である。このことからも明確に読み手に対して子供の頃について問い，読み手に過去を想起させながら，書き手の習慣を紹介していることが窺える。

「書き手と読み手が共有する関心と視点」については，次のような事例が見られた。

Это только у нас в нашей стране не читают газеты.「私達の中，私達の国だけで新聞が読まれていないと思う。」Многие не желают тратить деньги а про журналы вообще молчу, они и раньше были не очень популярны.「雑誌については言うまでもなく，多くの人は雑誌を買うためにお金をかけたくない，雑誌は昔から人気が無かった。」(KRR09:11-12)

KRR09では，私達（キルギス国民）とキルギスでは新聞が読まれていないという意見と，その理由が述べられている。書き手と読み手が所属している社会の状況を示すことで，書き手と読み手が同じキルギス国民であり，読み手と同じ性質を持っていることをアピールし，信頼を得ようとしていると考えられる。

「書き手の性格の良さ，判断力」としては，次のような事例が挙げられる。

Это лично моё мнение я не привязываю к тому что человек не должен использовать интернет и читать только книги.「これらは私の個人的な意見に過ぎず，人々がインターネットの利用を止めて，本ばかりを読むことを押し付けてはいない。」(KRR23:25)

KRR23は，この文に至るまでにインターネット，新聞・雑誌の両方が必要だと意見を述べてきた。しかし，この文によって，これまで述べてきた意見を個人的な意見とすることで書き手の謙虚さを示し，読み手の意見が異なっている場合も書き手として認められる柔軟な姿勢を表しているように見える。書き手と異なる意見も受け入れるような姿勢を提示することで，書き手の信頼を得ようとしていることが考えられる。

5．考察

本研究では，Connor and Lauer（1985）の「信頼性のアピール」に基づき，KK，RR，KRK，KRR の意見文の「エートスのトピック」を分析してきた。

モノリンガル群を見れば，KK の「エートス」に関しては，「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」の２点が出現し，RR では「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」の３点が出現した。一方で，バイリンガルを見れば，KRK については「書き手の直接的体験」「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」のすべ

てが出現した。KRR については，「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」の３点が出現した。そして，同じ「エートス」でもその内容には違いがあることが示唆された。

キルギス語話者について，モノリンガル KK と比較すると，本研究においては，バイリンガル KRK で使用する「エートスのトピック」の種類が多くなっていることから，第二言語としてのロシア語教育の影響も考えられる。また，冒頭に挨拶表現を置く等，キルギス語モノリンガルの意見文には現れなかった要素も見られたのもキルギス語優位のバイリンガルの特徴であろう。

ロシア語モノリンガル RR とバイリンガル KRR を比較すると，キルギス語話者のように使用する「エートスのトピック」には変化が見られなかった。

ロシア語とキルギス語の意見文における二人称代名詞の使用を Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論から比較すると，キルギス語では，親称単数 сен（sen），親称複数 силер（siler），敬称単数 сиз（siz）と敬称複数 сиздер（sizder）があるが，本研究では сен（sen），сиз（siz），сиздер（sizder）の使用が見られたが，いずれも文中では二人称代名詞が省略されていた。書き手が読み手に接近しようとする一方で，主語を省略し，文中で示さないことで，読み手への直接的な表現は避けていることが窺える。ロシア語意見文で見られたような１つの文章の中での二人称代名詞の親称と敬称の使い分けは出現せず，読み手への挨拶 саламатсыздарбы.（salamatsïzdarbï）や，一人称代名詞複数 биз（biz）の使用が見られた。キルギス語話者は読み手への直接的な意見は避けつつ，読み手を書き手と同じ視点を共有し，読み手のネガティブ・フェイスに配慮する説得のストラテジーであった。

一方，ロシア語意見文では，二人称代名詞親称 ты（ty）と敬称 вы（vy）の使用が見られた。ты（ty）はポジティブ・ポライトネスとして読み手に接近し，вы（vy）はネガティブ・ポライトネスとして読み手を忌避する言語形式と考えられる。今回の意見文の読み手は，「書き手と同世代のキルギスの大学生」としており，書き手にとっては「同等」の人物である。意見文においてロシア語話者は，вы（vy）と ты（ty）を使い分けることで，フェイス侵害行為（FTA）のリスクを見極めつつ，書き手と読み手間の心理的距離を接近させたり，忌避させたりして，読み手を説得するストラテジーであることが窺える。ただし，「目上」に対する文章では ты（ty）の使用が全く見られないという研究結果もあり（スリュウサレーヴァ，2011），読み手が書き手よりも「目上」の場合には ты（ty）の使用が憚られることが明らかになっている。文章における二人称代名詞の選択に関しては今後更なる検証が必要である。同じく二人称代名詞に親称，敬称を持つキルギス語についても読み手が「目上」の場合を検証する必要があろう。

リース（2014）によれば，トピックと関連して，「共通認識」があり，「共通認識」とは，共有された知恵，部族全体の前提である。「共通意識」はそれぞれの文化に特有なものであり，普遍的真理として通っていることが多い（リース，2014）。キルギスのように，複数の言語が併用されている同一社会文化における説得のストラテジーについても，所属する言語コミュニティによって「共通認識」が異なる可能性が明らかになった。

本研究で得られた結果から，それぞれの言語話者が受けてきた言語教育が意見文の内容に影響を及ぼしており，学校での第一言語教育，第二言語教育を通じて文章の説得内容を習得し，説得のストラテジーとして用いていることも考えられる。そこで，本研究での結果と第一言語としての「キルギス語」「ロシア語」教育で使用されている教科書を分析し，比較を試みた。分析対象とした教科書は「キルギス語」は８年生教科書（Imanov et al., 2016），「ロシア語」は６年生の教科書（Breusenko et al., 2019）とした。理由としては，Imanov et al.（2016）及び Breusenko et al.（2019）が，2020-21年度教育科学省推薦教科書一覧に記載され，かつキルギス国内で出版され，説得を目的とする文章が単元として扱われる学年の教科書であることによる。

「キルギス語」教科書では，文章における意見表明について，書き手の実体験や自分の意見を肯定する他者の意見を取り入れ，意見を述べる方法が挙げられており，KK，KRK において「書き手の直接的体験」が出現したことからも，キルギス語では「書き手の直接的体験」が重要な「エートス」であることが考えられる。

「ロシア語」教科書では，説得の構造は「論拠」「支え」「実例」の３点から成り，意見表明の後，意見を補強するために，書き手自身の言葉，もしくは確かな筋からの引用を用いて解説をし，実例を提示するという構造を示している。実例のトピック例として，「書き手自身の経験」「他者の経験」「著名な人物の発言」「明確な情報源からの引用」を提示している（Breusenko et al., 2019）。書き手自身の言葉が，本研究での RR，KRR で見られた「書き手の直接的経験」にあたり，ロシア語では書き手の経験が重要視されていることが考えられる。

本研究の結果から，キルギス語話者，ロシア語話者の「エートスのトピック」は学校教育の影響が表れており，二言語に共通して「書き手の直接的体験」が重要なエートスのトピックであることが窺える。

6．本研究のまとめと今後の課題

6.1. 本研究のまとめ

本研究の目的は，キルギス語とロシア語を主な言語背景とするキルギスにおいて，キルギス語・ロシア語バイリンガルによる，説得を目的とした文章の特徴を明らかにすることであった。本節では，2.3節で示した研究課題に基づいて，本研究で得られた結果をまとめる。

研究課題１：同一社会文化を背景とした異なる言語話者は意見文においてどのような「エートスのトピック」を用いようとするか。

本研究で実施した意見文課題からは，次の表１のような内容のカテゴリーがそれぞれ得られた。

表１　４グループ間で出現したエートス

グループ	エートスのトピック
KK	「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」
RR	「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」
KRK	「書き手の直接的体験」「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」，「書き手と読み手が共有する関心と視点」，「書き手の性格の良さ，判断力」
KRR	「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」「書き手の性格の良さ，判断力」

４群に共通して，「書き手の直接的体験」「書き手と読み手が共有する関心と視点」が出現しており，４群間の間で好まれる「エートス」であることが明らかになった。また，Connor and Lauer（1985）では「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」の「エートス」が挙げられているが，本研究で扱った意見文課題については，KRK のみの出現に留まり，冒頭での読み手への挨拶だったことから，意見文のような文章では出現しにくい可能性がある。

研究課題２：同一社会文化を背景とした異なる言語話者は意見文において「エートスのトピック」に言語的優位性が見られるかどうか。

キルギス語話者はモノリンガル KK とバイリンガル KRK 間で使用する「エートスのトピック」が異なることが明らかになった。また，二群間でキルギス語単一母語話者に見られない要素がバイリンガルには出現した。

ロシア語モノリンガル RR とバイリンガル KRR については，キルギス語話者のように使用する「エートスのトピック」には変化が見られなかった。ロシア語意見文では，読み手に対する直接的な問いかけや，二人称代名詞親称と敬称を使い分け，書き手の読み手への接近と忌避が見られたが，KK，KRK のキルギス語意見文では見られなかったため，ロシア語独自の説得のストラテジーである可能性がある。

バイリンガル KRK と KRR を比較すると，二者間で「エートスのトピック」に差が生じており，それは「書き手の読み手への関心と視点に対する敬意」であった。

本研究での結果においては，KK，RR の「エートス」よりも，KRK の方がより多くの「エートス」のバリエーションが確認されたため，キルギス語，ロシア語それぞれの「エートス」に基づくトピックを選び，読み手を説得している可能性が考えられる。また，本研究では，人称代名詞の使用において二言語間に差異が見られたため，説得を目的とする文章では，所属する言語コミュニティごとに「共通認識」が異なる可能性がある。

6.2. 今後の課題

本研究では，同一社会文化の１つの事例としてキルギスを取り上げ，KK，RR，KRK，KRR の意見文の説得のストラテジーについて，「エートスのトピック」に基づいて明らかにしたが，さらにデータを追加し，本研究の結論を検証する必要がある。また，Connor and Lauer（1985）の「説得のアピール」等の観点から，今回分析項目として扱った「エートス」に加え，「ロゴス」「パトス」との説得性の関連について検討する必要がある。キルギス語，ロシア語の説得を目的とする文章の規範と今回の意見文との差異を明らかにする必要がある。文章の形式面に着目した「文章構造」等の観点と，本研究での「エートスのトピック」のような内容との両面から捉え，複合的な分析を行うことも必要であろう。

今回分析に用いたデータは回答者が母語で書いた意見文に加え，日本語に翻訳したものを併用した。これは今回の調査対象であった４群の日本語学習者が日本語で書いた作文と比較することを意図したものであるが，第一言語と学習言語（日本語）の意見文を比較することで，説得のストラテジーの体系や習得過程を明らかにすることが可能になると考えられる。本研究の意見文データを収集する過程で，特に，キルギス語モノリンガルが既定の語数に届かないことや，書きにくさを感じ，断念する様子も見られた。ダブル・リミテッ

ド等の要因を考慮し，書く能力別に回答者を分類し検証するとともに，書き手が主張したいことを語れていない文章として分析の対象として扱い，意見文における論理の組み立てを分析することも検討したい。

注

1）本稿でのキリル文字表記については，小松他（2005）「翻字・アルファベット表」に倣い記した。意見文については日本語訳を併記し，原文のまま記載している。

引用・参考文献

伊集院郁子・高橋圭子（2012）「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴―「主張」に注目して―」『日本語・日本学研究』2，pp.1-16.

宇多文雄（2009）『ロシア語文法便覧』，東洋書店.

近藤章（1996）「「意見文」の作文技術」『作文技術指導大事典』（国語教育研究所編），pp.225-241，明治図書.

小松久男，梅村坦，宇山智彦，帯谷知可，堀川徹（2005）『中央ユーラシアを知る事典』，平凡社.

近藤行人（2013）「説得のアピールを用いた日本語学習者の論証文の分析―日本人大学生，ウズベキスタン人大学生との比較」『第二言語としての日本語研究』16，pp.160-177.

西條結人，田中大輝，小野由美子（2015）「意見文課題における説得のアピールの日西対照研究：日本とスペインの学生の作文比較」『教育実践学論集』16，pp.95-107.

西條結人（2019a）「説得を目的とした文章に関する対照修辞学研究の概観及び展望」『教育学研究ジャーナル』24，pp.13-22.

西條結人（2019b）「多民族・多言語社会における言語選択と使用に関する社会言語学的研究：キルギスの大学生を対象とした調査の結果から」『語文と教育』33，pp.1-13.

迫田久美子（2020）『改訂版日本語教育に生かす第二言語習得研究』，アルク.

スリュウサレーヴァ・エレーナ（2011）「書き言葉における，生徒・学生の対教師言葉遣いについて―ロシアの小学校・中学校・高等学校・大学の調査結果から―」『言語の普遍性と個別性』2，pp.103-118.

角田太作（2009）『世界の言語と日本語―言語類型論から見た日本語 改訂版』，くろしお出版.

田浦秀幸（2014）「第５章 読み・書き・語る能力の発達」『バイリンガリズム入門』（山本雅代（編）），pp.3-19，大修館書店.

深田博己（2002）『説得心理学ハンドブック：説得コミュニケーション研究の最前線』，北大路書房.

メイナードK. 泉子（2004）『談話言語学―日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』，くろしお出版.

柳沢好昭，石井恵理子（1998）『日本語教育重要用語』，バベルプレス.

柳澤浩哉（2004）「第４章 環境問題はなぜ注目されるのか」『シリーズ〈日本語探究法〉７ レトリック探究法』，pp.29-38，朝倉書店.

リース・サム（2014）『レトリックの話 話のレトリック―アリストテレス修辞学から大統領スピーチまで』（松下祥子訳），論創社.

Breusenko L., Matokhima T. (2019) Ruskii yazyk: Uchebnik dlya 6 klassa shkol s russkim yazykom obucheniya, ARCUS Publishing, Bishkek.

Brown, P. and Levinson, S. (1987) Politeness: some universals in language usage, Cambridge University Press.

Connor, U. and Lauer, J. (1985) Understanding Persuasive Essay Writing: Linguistic/Rhetorical Approach. Text 5(4), pp.309-326.

Imanov A., Kaybïldaev A., Saparbaev A., Usubaliev B. (2016) Kïrgïz tili: Sintaksis, II-bölük. Orto mektep. 8-klassï üchün okuu kitebi, Bilim komp' yuter, Bishkek.

Kamimura, T. and Oi, K. (1998) Argumentative Strategies in American and Japanese English. World English, 17(3), pp.307-323.

Korth Britta (2005) Language Attitudes towards Kyrgyz and Russian; Discourse, Education and Policy in post-Soviet Kyrgyzstan, PETER LANG, Bern.

Landau M. Jacob, Kellner-Heinkele Barbara (2001) Politics of Language in the ex-Soviet Muslim States-Azerbayjan, Uzbekistan, Kazakhstan, Kyrgyzstan, Turkmenistan and Tajikistan, Hurst and Company, London.

Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki (2018) Statisticheskii sbornik «Obrazovanie i nauka v Kyrgyzskoi Respublike», http://www.stat.kg/media/publicationarchive/96f08785-4102-4037-9650-bfe7315eaa68.pdf（2021年3月10日閲覧）

Orusbaev Abdykadyr, Mustajoki Arto, Protassova Ekaterina (2008) Multilingualism, Russian Language and Education in Kyrgyzstan, International Journal of Bilingual Education and Bilingualism,11(3-4), pp.476-500.

Skutnabb-Kangas, T. (1984) Bilingualism or Not – The Education of Minorities. Multilingual Matters, Clevedon, UK.

Tokbek uulu Bakytbek (2009) Learn the Kyrgyz Language: Connecting with People and Culture, Continent Print, Bishkek.

謝辞

本研究での意見文の分析にあたって，広島大学大学院人間社会科学研究科の柳澤浩哉教授には，レトリックや人称代名詞の分析の観点及び考察の示唆をご教示いただいた。深く感謝申し上げる。